

新規採用1,2年目職員がつくる 土木の日イベントについて

竹之内 彩音¹・諸井 輝生²

¹琵琶湖河川事務所 流域治水課 (〒520-2279 滋賀県大津市黒津四丁目5番1号)

²近畿地方整備局 総務部 (〒540-8586 大阪府中央区大手前3-1-41)

豊岡河川国道事務所では、毎年11月18日の「土木の日」にあわせて土木技術体験イベントを開催している。本イベントは、土木業界の将来を担う人材の育成と業界理解の促進を目的として、2017年に開催された建設現場開放イベントをきっかけに開始し、2022年以降は新規採用1,2年目職員が企画・運営を行っている。技官・事務官の垣根を越えて土木業界への理解を深めることを目指したイベント運営体制、実施内容の報告を行う。

キーワード 土木の日、広報活動、人材育成、若手職員、地域連携

1. はじめに

11月18日は土木の日である。土木の日とは、土木との触れあいを通じて土木技術および土木事業に対する認識と理解を深め、社会資本整備の意義と重要性について幅広い理解と合意形成を促進する日として、1987年に公益財団法人土木学会が制定しました¹⁾。土木の日の制定以降、土木学会をはじめ、国、地方公共団体、建設企業および建設業協会等が土木の魅力を発信する様々なイベントを実施している。近畿地方整備局においても、近畿技術事務所が主催する「ふれあい土木展」をはじめ、多様な広報活動が展開されている。



図-1 2025年度開催 土木の日開催状況



図-2 参加者集合写真

豊岡河川国道事務所において土木の日イベント開催のきっかけとなったのは、平成29年（2017年）に実施された「但馬地域イノベーションプロジェクト」の一環である建設現場開放イベントであった。地域住民に建設現場を公開し、建設技術や社会資本整備への理解促進を図った取組は、多くの来場者から好評を得た。平成30年（2018年）にはトンネルコンサートの開催を計画したものの、諸事情により中止となった。その後、令和元年（2019年）からは土木の日イベント「あたらしいどぼくのせかい」と題し、地元子どもたちや地域住民が土木技術を体験し、土木事業に関心を持つきっかけとなることを目的として、中郷遊水地工事現場においてイベントを開催してきた。令和4年（2022年）からは新規採用1,2年目職員が中心となり、企画・広報および運営を担う体制へと変更した。若手職員が主体となることで、来場者に近い目線から企画を立案できるほか、職員自身の人材育成にもつながっている。

本報告では、豊岡河川国道事務所における新規採用1,2年目職員主体でのイベント企画・広報・運営の取組について報告する。

2. 土木の日イベント 各班の役割

土木の日イベントの運営メンバーは、新規採用1年目職員、2年目職員およびオブザーバーである。豊岡河川国道事務所では例年10名程度の新規採用職員が配属されることから、イベント運営メンバーは1年目職員と2年目職員を合わせて20名前後で構成される。令和7年度

(2025年)は新規採用職員8名、2年目職員9名、事業対策官、豊岡出張所所長の計19名で運営した。

イベント運営は、企画班、広報班、総括の3つの役割を分担し、オブザーバーが適宜助言・支援を行う体制としている。

(1) オブザーバー

事業対策官と豊岡出張所出張所長がオブザーバーを務める。イベント運営に不慣れな新規採用職員に対して、所内調整、対外活動、協力企業との連絡調整など業務遂行に必要な基礎的知識や実務的な助言を行う。特に現場経験が少ない職員に対しては、現地視察時の安全管理や工事現場での行動、体験企画に関する技術的な知識など、幅広い支援をいただいた。

(2) 企画班

企画班は、イベントメンバー全員で検討した企画案を基に、企画内容の具体化、必要資機材の手配および協力企業との調整を担当する。各企画には1年目職員を主担当、2年目職員を副担当として配置し、1人2〜3企画担当する体制とした。企画班長が全体の進捗管理を行い、企画内容や必要資機材の整理を実施した。企画の方向性や内容の立案は主に1年目職員が行い、2年目職員が昨年度の経験を踏まえながら実現可能性や安全面の確認を行うことで、若手職員主体の企画運営を実現した。

(3) 広報班

広報班はイベントに係る全ての広報活動を担当する。メンバーは班長、1年目職員2名、2年目職員1名の計4名で構成される。主な業務はチラシ作成、SNS (X, Instagram) による情報発信、広報誌への掲載依頼、ラジオ出演などである。近年はSNSを活用した情報発信にも積極的に取り組み、若年層や子育て世代への周知拡大を図っている。

(4) 総括

総括はイベント全体のとりまとめ役として、対外調整および内部調整を行い、各班の活動を支援する。また、イベント保険の加入手続きや緊急時対応計画の作成など安全管理に関する業務も担当する。

(2) イベントタイトルの決定と企画内容

イベント開催が決定すると、新規採用職員研修が終了する5月頃にイベント運営メンバー全員を招集し、イベントの目的や趣旨を共有した。

その後、全員からイベントタイトル案および企画案を1つ以上提案してもらった。事務官や土木系以外の試験区分で採用された技官も多く、当初は企画立案に苦慮する職員も少なくない。しかし、過去の事例調査や他自治体イベント、建設技術展の出展内容等を参考にしながら企画を検討することで、多様な発想が生まれた。若手職員は一般来場者に近い間隔を持っていることから、「土木とは何か」「どうすれば興味を持ってもらえるか」という視点で企画を考えることができた。土木業界に馴染みのない職員ならではの視点から生まれる企画は、本イベントの特徴でもある。

令和7年度には、採用1年目の事務官が工事現場で見た舗装工事をきっかけに、道路模型製作ブースを提案した。道路担当の2年目技官との協同により実現し、来場者からも好評を得た。企画案の決定は6月から7月頃にかけて行い、実現が難しい場合には代替案の検討も行った。

(3) 企画内容の詳細決定とチラシ作成

企画内容が決定すると、各企画の詳細決定に着手した。企画班では必要資機材の整理、安全対策の検討を行い、広報班ではイベント告知用チラシの作成を進めた。チラシ完成後は関係機関への配布準備を行うとともに、SNSを活用した広報活動も開始した。



図-3 令和7年度イベントチラシ

3. 土木の日イベント 企画・広報

(1) イベント開催の可否

まず4月にイベント開催の可否を決定した。前年度の班長および事業対策官が中心となり、開催の必要性、開催候補地、予算を整理したうえで開催の判断を行った。また、事務所長の意向確認も実施した。



図-4 SNSを用いた広報

(4) 協力企業、参加小学校・高校との調整

8月以降は協力企業との調整を進めた。兵庫県建設業但馬地区協議会への協力依頼内容を整理し、事業対策官を通じて協力依頼を行った。また、教育委員会を通じて小学校および中学校へチラシ配付しイベントの周知を図った。さらに、前年度参加校に対しては直接参加意向を確認し、参加校の募集を行った。また、本イベントは毎年継続して実施していることから、前年度参加校からの問い合わせや参加希望も多く、継続的な学校との関係構築が参加者確保につながっている。参加希望校が決定した後は、学校ごとのスケジュール調整や体験内容の割り振りを実施した。また、現場レイアウトや動線計画、安全対策についても詳細な検討を行った。

(5) 当日の配役と所内への協力依頼

9月頃には参加校および協力企業が概ね確定し、必要人員が把握できる。そのため、事務所内職員へ協力依頼を行い、午前中のみ対応する職員と終日対応する職員に分けて役割分担を実施した。当日は多くの職員の協力により、安全かつ円滑なイベント運営を実現した。

4. 土木の日イベント 当日運営

11月18日のイベント当日は曇天であったものの、予定どおり開催することができた。招待した小学生および高校生は予定どおり参加し、各体験企画を通じて土木技術への理解を深めた。

会場では、重機操作体験やドローン操作体験、リフト車乗車体験など、実際の建設現場で活用される技術や機械に触れることができる企画を実施した。また、近畿地方整備局が保有する災害対策用機械の展示を行い、「はたらく車」として多くの来場者の関心を集めた。さらに、道路模型・堤防製作体験や液状化体験による災害体験などを実施し、社会資本整備や防災・減災の重要性について学ぶ機会を提供した。また、高校生を対象として八代水門および排水機場の見学を実施した。見学では、水門や排水機場の役割について説明するとともに、八代水門の上屋を見学し、河川管理や防災を担う豊岡河川国道事務所の業務について理解を深めてもらった。

参加した小学生や高校生は、普段見ることのできない建設機械や最新技術を実際に体験することで、土木をより身近に感じる様子が見られた。また、各企画では若手職員が説明役を担い、来場者との積極的なコミュニケーションを通じて土木の魅力を発信した。



図-5 道路模型製作の様子



図-6 イベントの様子（重機操作体験）



図-7 イベントの様子（ドローン操作体験ブース）



図-8 イベントの様子（リフト車乗車体験）



図-9 イベントの様子（災害対策車両展示）

5. 土木の日イベント アンケート結果

イベント終了後には、参加した小学校および事務所内職員を対象にアンケートを実施した。

(1) 良かった点

イベントメンバーからは、新規採用職員のうちからイベント運営に携われたことや、主体的に企画運営を行えたこと、また、若手職員ならではの柔軟な発想による広報活動や企画立案が良かったとの意見が寄せられた。協力職員からは、1, 2年目職員が積極的に取り組み、責任感を持って運営していたこと、参加した子どもたちの笑顔が多く見られたこと、多種多様な企画によって飽きさせない工夫が行われていたことなどの意見が寄せられた。また、小学生からは、「ショベルカーやドローンを操作できて楽しかった」「道路模型を初めて見てすごいとおもった」などといった感想が寄せられた。引率の教員からは、「初めてこのイベントを知った。とてもよいイベントのため、より多くの学校や地域住民に周知してほしい」といった意見も得られた。

(2) 改善点

一方で、小学生の滞在時間に制約があり、全てのブースを体験できなかったことが改善点として挙げられた。また、例年11月中旬頃に開催しているが、降雨による影響を受けることが多く、寒冷な気候や足場の悪さも課題として指摘された。開催時期や会場条件については、今後検討する必要がある。

(3) 各班班長の取組

班長を経験した職員からは、スケジュール管理や業務分担などマネジメントの経験を積むことができたとの意見が多く聞かれた。また、普段の業務では関わる機会の少ない職員との交流や、外部へ情報発信する責任感とやりがいを実感する機会にもなった。

6. 土木の日イベント 結果・課題

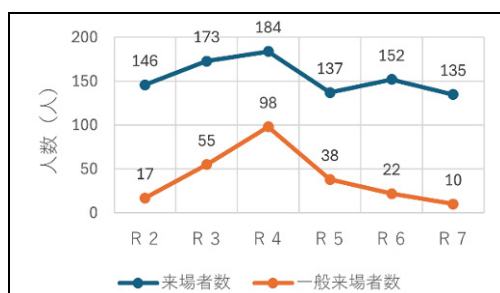


表-1 イベント来場者数推移

令和7年（2025年）の土木の日イベントの来場者数は135名であり、近年の来場者数の推移は表-1に示すとおりである。令和2年（2020年）以降、一般来場者数は減少傾向にあり、新たな広報手法や来場促進策の検討が今後の課題である。また、イベント開催時期である11月中旬は降雨の影響を受けることが多く、雨天となる年が続いている。工事現場を会場としているため、降雨時には足下が悪化し、来場者の安全確保や快適性の面で課題が生じる。

今後は、天候リスクを考慮した運営方法の検討や、さらなる広報活動の充実を図ることで、より多くの地域住民に土木の魅力を発信していきたい。

7. 若手職員の人材育成効果

土木の日イベントは、地域住民への土木事業の理解促進を目的として実施しているが、新規採用職員の人材育成という観点においても大きな効果を有している。本イベントでは、企画立案から広報活動、対外調整、当日の運営までを若手職員が主体となって実施しており、通常業務では得られない経験を積む機会となっている。

(1) 1年目職員への効果

1年目職員にとっては、入省後初めて主体的に業務を企画し、実施する機会となる。通常業務では上司や先輩職員の指導のもと業務を進めることが多いが、本イベントでは企画内容の立案から必要資機材の検討、関係者との調整までを担当するため、自ら考え行動する力が養われる。また、事務官や土木系以外の試験区分で採用された技官にとっては、土木技術・事業について学ぶきっかけとなる。来場者や小学生へ説明するためには、自らが企画内容や土木技術について理解する必要があることから、土木事業への理解促進にもつながっている。さらに、協力企業や学校関係者との調整を通じて、電話対応や資料作成、対外的なコミュニケーション能力など、社会人として必要な基礎的能力の向上が図られた。

(2) 2年目職員への効果

2年目職員は、1年目職員の補助や班長としての役割を担うことが多く、前年の経験を活かしながらイベント全体を支える立場となる。そのため、企画の進捗管理や実現性の確認、安全管理の視点を身につける機会となっている。また、1年目職員への助言や業務分担の調整を行うことで、リーダーシップやマネジメント能力の向上につながった。

自らが経験した失敗や課題を後輩へ伝えることで、知識やノウハウの継承も行われている。特に班長を務めた職員については、イベント全体の進行管理や関係者との

調整を担当するため、通常業務では経験する機会の少ないマネジメント業務を実践的に経験することができた。

(3) 若手職員主体で実施する意義

本イベントでは、1年目職員が主体的に企画を立案し、2年目職員が助言・支援を行う体制としている。この体制により、1年目職員は「挑戦しながら学ぶ」、2年目職員は「後輩を支援しながら組織を動かす」という、それぞれの成長段階に応じた経験を積むことができる。また、技官と事務官が同じ目的に向かって協力することで、職種間の相互理解や人的ネットワークの形成にもつながっている。イベント終了後も部署や職種の垣根を越えて相談や連携がしやすくなるなど、組織力の向上にも寄与している。

以上より、土木の日イベントは地域への広報活動としてだけでなく、若手職員の主体性、調整能力、コミュニケーション能力およびマネジメント能力を育成する実践的な人材育成の場として有効であることが確認できた。

8. おわりに

豊岡河川国道事務所では、土木の日イベントを通じて地域住民への土木事業の理解促進に取り組んできた。特

に令和4年度以降は、新規採用1、2年目職員が主体となって企画・運営を行う体制とすることで、来場者に近い視点を活かした企画立案が可能となり、多様な体験企画の実施につながっている。また、本取組は広報活動としての効果だけでなく、若手職員の人材育成の場としても有効であった。1年目職員は主体的に考え行動する力を、2年目職員は後輩を指導し組織をまとめる力を養うことができた。今後は、来場者数の拡大や天候による影響への対応を課題としつつ、地域への広報活動と若手職員育成の両立を図りながら、より魅力的なイベント運営を目指していきたい。

本論文は発表者の従前の所属である豊岡河川国道事務所での業務内容を題材としている。

謝辞：豊岡河川国道事務所主催イベント「あたらしいどぼくのせかい」にご協力を賜りました一般社団法人近畿建設協会様、兵庫県建設業但馬地区協議会（豊岡支部、浜坂支部、南但支部）様、協力企業の皆様へ厚く御礼申し上げます。

参考文献

1) 土木学会：土木の日とは？